

野生動物保全管理学

① 日本の哺乳類相の特徴と変遷

野生動物管理の基礎となる日本の哺乳類相の変遷についてまず紹介する。日本には 110 種の哺乳類が生息しており、多様性が高く、かつ固有種が多いといった特徴がある。加えて、50.9%が環境省レッドリストに掲載されている。これらの特徴は、日本の森林環境が多様であり、かつ過去の気候変動や地形形成など歴史を反映したものとなっている。ニホンジカやクマ類など大型獣においては、縄文時代から江戸時代まで分布はほとんど変化せず江戸時代から 1970 年代にかけて大きく分布が減少した。その後、大型獣の多くは分布を回復・拡大しているが、ニホンカモシカは 2000 年代以降全国各地で個体数・分布が減少している。以上のような哺乳類相の変遷について解説する

② 野生動物の過増加とワイルドライフマネジメント

1970 年代以降日本で起こっている大型獣の過増加の実態とそれに起因する農林業被害、人身被害や生態系被害について紹介する。過増加については、現状およびその背景や要因について解説する。さらに、生態系被害については、植物群落等への直接的な影響のみならず、植生が変化することによって鳥類相が変化したり、土壌流出によって淡水魚に影響したりする間接効果についても紹介する。最後に、上記の実態を踏まえたワイルドライフマネジメントの基本的な考え方を紹介する。

③ 個体群動態の基礎とモニタリング

野生動物管理においては、個体数推定や生息密度の時間、空間動態を把握し、対策につなげていくことが重要となる。適切な対策を検討していくうえで、個体数推定やモニタリングの結果を正しく理解する必要がある、そのために必要な個体群動態の基礎知識をまず紹介する。次に、個体群動態を把握するためのモニタリングについて、獣種ごとに一般的に用いられているモニタリング方法をその特徴と留意点も踏まえて解説する。最後に、モニタリング結果を用いて実施する個体数推定の手法や考え方、推定を行う上でポイントとなるモニタリングの調査設計について紹介する。

④ 野生動物の生息地

野生動物が利用する生息地の概念や野生動物の行動、さらには被害管理につながる野生動物にとっての生息地価値について紹介する。まずは生息地がこういった考え方に基づくのか生息地の理論的な考え方、概念を紹介する。次に、種の分布の中で野生動物がこういった景観を利用するのか、行動圏を構えるのかといった行動圏の考え方を調査方法等踏まえて解説する。また、人による捕獲圧も行動圏、生息地選択に影響することにも触れつつ、野生動物管理における生息地の考え方や生息地管理についても概要に触れる。